

# 2022年 5月1日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

詩編 16編 「心は喜び、魂は躍り、からだは憩う」 高橋彰

## 6 | 【ミクタム。ダビデの詩。】

神よ、守ってください  
あなたを避けどころとするわたしを。  
2主に申します。  
「あなたはわたしの主。  
あなたのほかにわたしの幸いはありません。」  
3この地の聖なる人々  
わたしの愛する尊い人々に申します。  
4「ほかの神の後を追う者には苦しみが加わる。  
わたしは血を注ぐ彼らの祭りを行わず  
彼らの神の名を唇に上らせません。」  
5主はわたしに与えられた分、わたしの杯。  
主はわたしの運命を支える方。  
6測り縄は麗しい地を示し  
わたしは輝かしい嗣業を受けました。

「ミクタム」は16, 56–60編にあり、意味が不明な言葉で「金言」や、七十人訳では「碑文」と解されています。16編はダビデに結びつけられ、神の憐れみを求める「嘆き」を歌った詩です。

詩人は神を「あなたこそ、わが主」(2)と呼び、その方のもとに「逃れました(避けどころとする)」(1)と語り出します。その「主のほかにわたしの幸いはない」と語り、それまで自分が引かれて(愛する、喜ぶ)頼ろうとしていた「力ある者(尊い人々)」=「ほかの神」に対して、もう供え物を献げず、その名を口にしないと言って決別します。

聖書の言葉が豊かなイメージで神との交わりや信仰を表現するなかに、しばしば「場所」のモチーフが用いられます。神の招きはアブラハムとサラを出発させ(創世記12:1-)、「私が示す地」である新しい場所へと導かれました。その歩みを通して「信仰」を体験的に得てゆきました。イエスも「わたしについて来なさい」と弟子たちを召し出されて導かれました。このような方法で、人は神との出会いと関わりの経験を表現しています。詩編は祈りの中で自分のいる「場所」を確認し、移ってゆく仕方で神への立ち帰りを表現しようとするものが多くあります。

「穴」はわたしたちのさまざまな苦難や病、八方ふさがりの状況、暗さや虚しさ、周りとの断絶、死の予兆をも表します。ヨセフは兄たちによって(創世記37)、預言者エレミヤも敵によって(エレミヤ38)穴に落とされます。10節の「墓穴」(シャハト)は生きるために必要なすべて、物も人との関係も奪い取られた、無力さ、忘却、死を味わわされ、神の助けも得られず、神に呼びかけることのない場所です(詩編28:1, 30:10, 35:7–8)。

7わたしは主をたたえます。

主はわたしの思いを励まし

わたしの心を夜ごと諭してくださいます。

8わたしは絶えず主に相対しています。

主は右にいまし

わたしは搖らぐことがありません。

9わたしの心は喜び、魂は躍ります。

からだは安心して憩います。

10あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく

あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず

11命の道を教えてくださいます。

わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い

右の御手から永遠の喜びをいただきます。

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

陰府(シェオール)も、力のない、暗く、失意に満ち、喜びや神との交わりがない場所です。しかし主はわたしをそのような「穴」に置かれることはない。そこはわたしがずっといる場所ではなく、引き上げ、ご自身のもとに招き、「命の道」へと導かれ、すぐ傍らにいてくださる方だと、主をほめたたえます。

このことは、神を信じ、神が招かれるもとへ逃れるように頼つてゆくことは、わたしたちが自分の生きるべき場所を放棄してしまうことではないと伝えています。「わたし」の中にいのちの源や喜びを見出すのではなく、主が与えてくださるものであると認め、向き直り、頼り、そこから喜びを受け取り、いのちを始めようというのです。穴の中にいながらも、御翼をもって避けどころへと導いてくださる主を思い起して祈るのは希望に生きること、穴の深淵を打ち破り、喜びへと向かう歩みを始めることです。心は喜び、魂は躍り(全身全霊が震えるような喜びがわき上がり)、からだは憩う(住まう)と表現されます。わたしたちが「生きる」とは、穴から引き出す神の招きに逃れゆくところから始まる「喜び」があるものなのだというメッセージに励されます。

初代のキリスト者たちはこの詩編を引用して、主イエスの復活を証言し、解き明かして語りました(使徒言行録2:25–、13:35)。イエスは十字架で死なれたが、神はイエスを復活させられた。墓の中にそのままにはされなかった。「陰府に捨ておかれて、肉体は朽ち果てなかった」。陰府さえも主との断絶にはなりえない、見捨てられた結果ではない。たとえ神から遠く離れてしまったと思われる状況でも、主なる神はわたしを見出し、呼び戻してくださり、招き入れてくださる、主イエスの復活がわたしたちをも陰府から引き上げられる神のちからを証言します。

# 教会の約束

わたしたちは、神の恵みによってイエス・キリストは主であると信じ、告白してバプテスマを受け、この教会の一員に加えられましたので、聖霊の助けによってこの約束をいたします。

わたしたちは、この教会が人によってではなく神によってできたものと信じ、主の日の礼拝、教会の定めた集会に参加し、教会がきくなるよう、一致するよう、栄えるように祈ります。またバプテスマと聖餐の二つの礼典、そして聖書の教えと教会の定めた秩序とを守ります。

わたしたちは、この教会を支え、また世界に福音を伝え、神のみ心が広く行われるために進んで必要なものをささげます。

わたしたちは、主にある兄弟姉妹として愛しあい、互いの喜びと悲しみをともにいたします。

わたしたちは、ひとりで祈ることや家族と共に祈る生活を大切にし、わたしたちが預かったこどもたちを神に喜ばれるものになるように教育育て、またまことの心と正しい行いとすべての人を愛することによって、人びとを救いぬし みちび こころが しゅ ふたた あ とき やくそく かた まも おし そだ ひと すく 主に導くよう心掛け、主と再び会う時まで、この約束を固く守ります。

わたしたちは、どこにあってもこの約束の精神と神の言葉の真理が実行される教会に加わることを約束いたします。

日本バプテスト同盟 関東学院教会

## 「教会の約束」について

「教会の約束」と言われるこの言葉は、Church Covenant と言い、本来は教会契約と訳されるべきものです。

バプテスト教会の一番の特徴はこの「契約」を結ぶということにあると言われます。17世紀にイギリスに発足した初期のバプテスト教会は、ただ信仰を告白しバプテスマを受けた信仰者の集まりとしてではなく、「契約共同体」として教会形成がなされました。

契約とは、第一に神と教会員の、第二に教会員相互に交わされる二重の構造を持ちます。教会の一員になるとは、神との、そして信徒相互の契約のパートナーになるのだという自覚と責任をもって集まっていたのでした。

一つの教会が各自で教会の契約を結ぶゆえに、各個教会が尊重されるのです。そういう意味で「教会の約束」はバプテスト教会の本質的で重要な意味を持っています。

本来ならば関東学院教会固有の「教会契約」があるのが望ましいですが、教会では、日本バプテスト同盟に連なる教会が多く採用してきた約束の言葉を採用していました。この「教会の約束」の本文は2009年改訂新版の日本バプテスト同盟「信徒の手引き」にある口語文の言葉です。かつて関東学院教会で唱えられていた文章は文語体でしたが、このたび聖餐式の中で唱和することを再開するにあたり、同内容の口語文を採用いたします。

聖書では、神はイスラエルと契約を結ばれた方であると証言しています。そしてイエスの十字架と復活は、神とわたしたちの新しい契約です。神は罪ある人を愛し、赦し、救い出して新たに生かしてくださいます。

約束してくださる神に支えられ促されて、わたしたちも神と、そして人々と、愛と赦しの関係に生きるというこの教会の約束を心から唱和し、その道に歩みたいと心から願います。